

授業改善、60歳ベテラン教師への提言（2）

栞原 昭徳

Improvement of Elementary School Lessons

— Proposing Teaching Methods to an Experienced Teacher (60 Years Old) II —

KUWAHARA Akinori

(Received January 12, 2007)

キーワード

授業改善・学習規律・授業の実力

◆本論は、「授業改善、60歳ベテラン教師への提言（1）」よりつづく論文である。

f. 挙手して教師の指名のあと発言すること

自分の意見を発表するとき、子どもたちは挙手して、原則として教師の指名のあと発言することです。子どもたちが私語をしていたら、教師は必ず「勝手に発言してはいけません」と言わなくてはなりません。

もし、勝手な発言をした子どもがいたら、「もう一回、言い換えて」というようにして、必ず指名されたあと、きちんと起立して、「ぼくは、〇〇です」、「そのわけは」とか、前回の（9月の校内授業研究会のとき）に、「発表の仕方」の何段階かをお話したと思うのですが、あの「発表の仕方」を丁寧に指導してやってください。もちろんC先生だけではなくて、ほかの先生方も指導してください。すると、子どもたちは、お互い直接見ることはないけど、何か感じ取って実行しますからね。ぜひとも、ほかの先生方も、各教室でやってください。

g. 学習準備も教師の指導のうち

授業が始まるときには、ノートに必ず日付け、「十月四日」、「お手紙」、そして「第〇場面」だとか「〇ページ」などを書いて、（今日あたりは）2年生ですから「たくさんの先生が見られた」と書いていてもいいでしょう。日付や題名を書くという仕事をすることによって、子どもたちは授業が、チャイムが鳴る前に学習内容に近づいているわけでしょう。そして、今日、プリントなんかを渡しましたね。プリントでも、少しでもやったら、ノートの大きさに切って、貼るというのも勉強のうちだと思ってください。プリントを出したら必ずノートに貼る。

また、ノートに番号をつけて、（子どもが自分で）何冊も勉強できるような仕事を、先生が考えるのです。みやすい宿題を考える。かけ算九九、今からはじまりますね。すると、問題を出してやって、答を渡して、小さな字で問題を出してやったらいいのですよ。そし

たらね、「ノートに写して、答を書きなさい」と言ったら、もうノートを何ページでも使えるでしょう。

そして、これは、鳥取の方の先生にも私が教えたのですが、サイコロには1から6まで数字がありますね。二つ振って、かけ算九九の学習が終わるころに、出た目をノートに書いて、どんどん自分で勉強する。サイコロは、1から6の段（目）までしかないので、7、8、9（の段）は、1、2、3のところの目に、セロテープでも貼ってやると、九の段まで勉強できるでしょう。そして、サイコロ二つ振りさえすればいいのですから、いくらでも勉強ができます。その結果、ノートがなくなるでしょう。そんな仕事をつくってやるのです。

じつを言うと、これは、私が広島大学附属小学校で1年生をもっていたとき、足し算でやったら、もう、勉強しなかった子がするようになるのです。そんなことを考えて、とにかく、子どもがどんどん勉強できるような仕事をつくってやってください。その相談には、校長先生も教頭先生も、1年生の先生も3年生の先生もいろいろのってあげてください。そして、学校全体がそういう、ノートをどんどん使って勉強し、宿題も自分たちで考えて作りだすような学校にしていったとき、兄弟や親がおりますので、いろんなことが起きますのでね。どんどん勉強する方に向かいます。

それと、今日何度も言いましたが、先生が（子どもの）仕事を取らない。黒板に出て、何かするということは、子どもにとってはドキドキもので、うまくできたらすごく嬉しいことなのです。そして、音読したあと、（黒板に貼ってあるカードの）移動は子どもがする。なるべく黒板のところで説明することを考えてください。たった12人しかいないのですからね、もう1時間のうち、1、2回やらせたら、必ず全員ができます。

h. 音読を重視すること

そして、音読を重視することです。何度も音読したら、必ず（授業に）参加できます。私、この前から授業を二回やりましたが、ほとんど、音読で授業もっている（様なもの）ものです。算数にしる、国語にしる、音読を多用します。そしたら、全員参加です。

ほとんど、はじめて出会う子どもたちなのですよ。それも1時間目に授業見て、私、（そのあとすぐに）指導案つくって、5時間目にしたり、前の日に（授業を）見て、次の日にやったこともありますよ。それも全部、その学校の先生たちが見ているのです。それでもできるのです。

つまり、その先生がやったことより、ちょこっとレベルの高いことを（私の授業の中で）やったら、子どもって得意になって（やって）しまうのです。ということは、今できることをもとにして、ちょっと難しいことをやりさえすれば、誰だって、子どもが喜ぶような授業ができるのです。そう思ってください。

i. 学力向上、先進校の取り組み

話を少しまとめますと、この前も言ったかもしれませんが、私が行っている中学校、中学校ですよ、学力向上で大成功をおさめている学校に岸本中学校というのがあります。この11月にまた行きますけど。その学校は、学力は（鳥取）県で2番目ですよ。高校の進学先が隣の中学校とほとんど違う。それは、4年前の2月にやり始めてから、それだけ成果があるんですよ。その成果のもとになった基本的なことは、3つしかない。

1つは、「授業始まりも丁寧に指導しよう」というので、中学校の先生というのは、指導することがバラバラなのが相場なのです。しかし、40代の真面目な男性教師が数人いるのです。英語、国語、社会、数学あたりで。すると、若手の先生はサボれないのです。だから、職場にモラルがあるのです。だから、チャイムがなるときには、先生必ず教室にいるのです。中学校でそれをやっているのです。

小学校はもう、お互いの教師が近いし、慣れているのですからできるじゃないですか。一番目は「授業始まりをきちんとしよう」です。授業が始まるときに、先生がいること。つまり、時刻をまもり秩序を守るということですね。そして、1分たりとも授業時間を削らないということです。これが1番目。

2番目はね、「ノートを中心とした教科経営」です。ノートというのは、さっき言ったように日付だとか、自分で書かないとなくならないのです。その上、オープンエンドの、どんなに勉強を多くしても構わないような学習を仕組むことができるのです。ノート作業は、本当に主体的にやらないと、できない仕事なのです。ところが、簡単にプリントを出しますと、教科書の記述を書いたら終わりというようなプリントにしますと、学力はつかないのです。ノート中心の教科経営を中学校で実践したのです。

3番目は何だったとおもいますか？ 3番目はね、じつは「黒板のところで発表することを心がけよう」でした。中学生でやるのですよ。たったその三つを丁寧に実践することで、学力向上という結果にたどりついたのです。

そしてね、英語なんかでこのごろ外国人の、アシスタントイングリッシュティーチャー(AET)とか、ALTのLは何？アシスタントランゲージティーチャーですか。中学校の外国人の先生なんてハイ(テンション)ですからね、いちばん賑やかで陽気で活動しているのは先生、日本人の英語の先生というのも、けっこうハイなのです。静かなのは生徒たちだけなのです。その状態から、子どもにいかにか活動させるかが問題なのです。

生徒が大きな声で発音すること、これを実践したら、もう私がベタ褒めの英語の授業がありました。中学校では、もう英語のまともなものを見たことがありませんでした。『これは先生、いい授業だ』と校長先生に言いました。校長先生が待ってましたとばかりに、『はい、乗原先生、県の平均より10点良いです』と教えてくれました。英語の点が10点良かったらね、他の教科はもっと良いです。そして、いろいろ聞くとおなしに話し始めて、とうとう『進学はこの地域で1番です』と言われました。結局、学力向上というのは、その三つからスタートしたのです。その校長先生は、『私はここに来て3年目です。乗原先生は、わたしが来る1ヶ月前にここに来て、講演してくれました。そこから始めました。』これですよ。学力向上というのは、そんな簡単なことから始まるのです。

もう1回復習すると、一つ目は「授業始まり、授業始まりをきちんとしよう。それも学級の実力のうちだ」です。2番目がノート中心の教科経営をする。特にね、小学校では音楽や体育でノートをするのは難しいですから、国語と算数だけで良いです。明日から番号をつけてはじめてください。今使っているのをそのまま使うのも手ですが、新しいノートをパッと配って、「番号をつけなさい」といって、2号、3号といったときに、今使っているノートを使えばいいんです。1号目を新しいノートでやらせるというのは、コツですね。

これはもう、九州できちんと実践した非常勤の先生がいます。もう、いちばん早い子が

20日間くらいでしたかね。学年末までには、多い子が1ヶ月に4冊ということですよ。だいたい高学年の子どもは、そのくらいするのです。ただし、勉強がおもしろくなればという条件が付きますがね。つまり、学習意欲や勉強の楽しさを育てるのも先生の仕事なのです。そして、最後が「黒板のところで発表する」です。

j. 本校で取り組むことがら

ということは、今日の子どもたちに置き換えてみます。

授業始まり。結構うまかったですよ。あとはあれに、ノートに日付と教科書を開くことをやったら良いのじゃないですか。そして、今日、黒板のところで発表するのは、先生がやってしまいました。おそろく言えばやるのではないのでしょうか。最初、一人ほど例をしめしたら、やりたい子どもが多いのではないのでしょうか。音読もできるのではないのでしょうか。さいご、ノート中心の教科経営。つまり、宿題を出してやる。そう気をつけてね、半年がんばってみてもらえませんか。おそろく子どもは、勉強の方に集中して、賢そうな子どもになると思います。

実をいうと、私はこの3月26日から言葉の遅れた孫と暮らしていますが、本当に人間の子どもというのは、きちんと生活しながら育ててやると賢そうな顔になりますよ。緊張した、賢そうな顔になります。ぜひ、先生というのは勉強への構えはもちろん、意欲も、勉強好きにも授業の中でどんどん仕事を考えるプロだ、と考えて、もう今日からスタートしてもらえませんか。

それはね、C先生だけの問題ではなくて、全学級でやり始めたときに、本当にC先生を支えることができるし、ちょっとした助言もできるのですね。

「私こうしてみたら、1年生の子どもが、こうなったよ」っていうように、お互い、職員室で教室の子どものことが語り合えるような職員室でありつづけたら、きっとC先生、半年を楽しく、有意義に過ごされると思います。ベテランというのは、そういう力をもっている人のことです。

以上、だいたい言いたいことは終わったのですが、質問でもあれば、われわれ、もう少ししたら帰りますからね、あと、30分したら、明日からどうするかみんなて話し合ってください。その方が、よっぽど有効ですね。そうしてください。もう、本気に考えてください。あの子たちをどうするかであり、C先生が3月31日の24時に何もなければ終わりますからね、そのときに、楽しくにっこり4月1日が迎えられるように、みんなて支援していく、そんな職場であってほしいですね。

k. 質疑応答、ADHDの子ども

(校長先生が、挙手される)

栗原「どうぞ。」

校長「教室経営のことですね、いまごろADHDの子どもとかいますよね。ものすごく気にするのですよね。光とか、机の配置とか・・・私語もしやすくなるし、そんな話をしてたですね。班の人数は？」

栗原「決定的なことはないですね。3人でも良いし、2人でも良いし。どちらでも構わ

ないと思います。要は、慣れで、たった12人しかいないのですから、教室の中の机と机の間の通路を広げるとかできますね。ただ、2人の方が出やすいですね。まあ、3人は話し合うときに便利なんです。もう、班にしてやって、『〇班がんばってるね』って間接指導をしてやれば、すぐに言うことを聞けるかもわからないですね。で、ADHD だとか、私は障害のことに詳しいわけではないけど、(教室に) そんなに困った子どもはいないような気がしましたがどうですか? いるのですか? あの、2年生ですよ。』

先生方「それはいません。」

栗原「まず、今日は2年生をよくすることを考えてください。他の学級はあと、ぼちぼちやってください。今日見たかぎりでは、2年生はせっきく3人班になっているのですから、少し間をあけて、出やすくするくらいはしてもいいかもしれません。

それと、先生の教卓がちょっと大きすぎたり、邪魔になっているでしょうね。教卓は小さく、低く、上にあまり物をおかない。けっこう(上に物が)置いてなかったかね? 子どもたちから見れば、なるべく黒板のところに出やすくする。机の上の山が気になりました。教師がお互いに助け合ったり、助言しあったりするためには、自分が本気で仕事してないとだめなのですよね。」

1. 宿題の出し方

C先生「宿題とか出したときに、いちおう出来るようにはして出すのですが、『できなかつたら無理しなくていいよ』といいます」

栗原「そんないい加減なことを言うからいけないのです。」

C先生「それで、『どういうふうなの?』とか聞いたりするときに、『こういうふうだよ』とか説明して。」

栗原「そんな説明をしなくてはならないような宿題を出してはいけないのです。

宿題というのは、授業の中で学習方法を教えたら、家で簡単にできるようなことを宿題にしなかつたらいけないのです。わざわざひっかかるような宿題は、宿題とは言わないのです。

宿題を出すコツは、最初のころは例えば20分かかる問題があるとしましょうか。そのうち5分を学校の終わりの会や授業の中で練習するのです。取りかかりを学校でやるのです。それで、ほとんど大半の子どもはできます。

そして、どうしてもできない子は、先生がついて、帰る前にやらせるのです。帰る前に。まあ、集団下校とかあるかもしれないから、なにか工夫する。給食の時間だってあります。やれないことを考えるよりは、どうやったらできるかを考える方が早いのです。」

C先生「『うん、できる』って言ってやってこない。」

栗原「つまり、やってこないことを教えてしまったのですよ。そう考えた方が早いです。やってこない子どもがいるということは、やってこないでいいことを先生が教えたのです。そう考えてください。」

C先生「それはわかるのですが、国語やなんかで漢字でもできないっていうか、ちいさなことも書かせて、テストみたいなのをやるんですけど。なかなか…。ノートなんかでもやるんですけど。」

栗原「たとえば、漢字のテストなんかでも、5問だけを出しといて、『練習してきなさい。明日これをテストします』と言ったら、何かできませんか。』

C先生「それはできるんですけど」

栗原「それでいいんじゃないですか。それをどんどん増やしていくということですよ。それを増やす。毎日5問ずつやったら、100日きたら500になりますよね。今日は、大体、200日の授業日の何日目くらい？ ちょうど真ん中くらいじゃない？ 100日前後じゃない？ ちょうど良い日ですよ。今から、半分の100日をどれだけあの子たちをえらくするかということですよ。そしてね、先生がね、いかに子どもがやりやすい問題を出すかとか、いかにおもしろい仕事に仕立てるかということを考えてら良いのです。

勉強というものは、本来、おもしろいものなのです。そう思って、先生方もそれぞれの学年で、『私はこうしたよ』という情報を職員室で交換することです。たったこれだけしかないのですから。なにか、そこからスタートすることですね。さっそく今日、話すことですね。と私は思います。

あの、宿題の出し方だって、けっこう知恵が必要です。専門家としての知恵がいるのですよ。』

m. 忘れ物

C先生「忘れ物があって・・・」

栗原「忘れ物があるということは、先生が学年始めから指導した結果として、いま、子どもたちが忘れ物をしているということなのです。厳しい言い方をしたら。

つまり、先生って言うのは給料をもらっているわけでしょう。その、2年生のはじめのときには忘れていても、しだいに忘れ物をなくするのが、先生の仕事なのです。教育というのは、自然現象ではないのです。先生が指導して、よくすることを教育というのです。

だから、私はね、いろんなクラスを担当しましたが、最後、「騒がしい学級」も担当しました。学年始めの学級の状態というのは、たとえ、どんなに荒れた学級であっても構わないと思っています。先生というのは、4月8日に出会ったら、次の日には、前の日よりちょっと良くすれよいのです。

それを、今なら200日、昔なら240日やりつづけたら、普通の学級かそれ以上に勉強のできる子どもになるのです。だから、私に言わせたら、指導力のある先生のクラスを持ったら大変です。あとは、落ちるしかないのですから。騒がしくて誰ももちたくないような、ガチャガチャのクラスをもったら楽です。ちょっと指導したら、良くなるしかないのですから。そう考えませんか？ 私はずっとそう考えてきました。

だから、公開授業、学校のみんなに見てもらう授業も何度かしましたが、どんな学級だってします。ただし、音楽や体育をやれと言われても困りますが。算数、国語、社会なら、前の時間、担任の先生の（授業）を見せてもらったら、1日くださったらとてもハッピーにやりますね。指導案もちゃんと書きますよ。つまり、今の子どもよりも、ちょっとだけ良くなる仕事を考えればよいのですから。そんなに難しい仕事ではないのです。

ということで、いろいろなことがあるでしょう。宿題をしないとか、忘れものが多いとか。それも、100日ほどたったら、教師である自分の「指導の結果」だと思った方が早いのです。なぜ忘れ物がないように、本気で勉強するように指導できなかったかを考えた方が早いのです。人のせいにはしないということです。教育は、自然現象じゃないのだから。間違いなく、担任の先生はじめ、校長教頭を中心とする教師集団の指導の結果ですよ。

n. 地域性と教師の仕事、そして研修のあり方

原「ところで、地域性なんていうことがありますけど、その地域性をもかえるのが、学校の力じゃないですか。困った家庭もあろう。しかも、親に理解がなく、いろいろなマイナス条件があるかもしれないが、学校にきたら、先生がいるから、友だちがいるから楽しいところにしてやるのが、学校（先生）の値打ちじゃないですか。

こうみると、いろいろな家庭があるのでしょうけど、しかし、この学校の校区は落ち着いた地域ですよ。都会にはない。また、それなりにマイナスがあるのかもしれない。しかし、先生というのは、マイナスの条件をプラスに変えるのがプロでしょう。地域も含めて、宿題も、勉強好きにするのも、意欲を育てるのも先生の仕事なのです。そう思いませんか。

そして、お互い、いろいろな年齢の、経験年数の教員がいますけど、それぞれの年数なりにがんばれる職場に、お互いがしていけるということでしょう。だから、ときにはお互いに厳しいことも言わなくてはいけないし、良いことも、あえて言わなくてはいけない。そんなことをきちんとやって、それぞれの年齢や立場や、自分に与えられた役割をまっとうしながら、全体としてはそれぞれの教師の、指導力や授業力が上がってなかったら研修の意味は全然ないのです。

去年も研修があったはずですよ。（C先生に対して）去年、C先生（は公開授業を）されましたか？」

C先生「はい。」

原「だったら、自分の授業力、実践力が去年より良くなっていなかったら、それは研修の仕方（取り組み方、方法）が悪いということなのです。そして、おそらく若いときにも研修や公開授業はありましたよね。そのころと比べて、ぐんとよくなってなかったら、まっとうな、あるいは立派な研修をしたといえないのです。そんな真剣な研修をしてみないといけないのではないですか。

私が出かけていく成果を上げている学校というのは、みんな真剣に研修に取り組んでいます。今日は、この学校で1つの授業を見ましたが、熱心な学校というのは『朝早くから来てくれ』と言って、全員の授業を見させられます。そして『一人一人どうしたらよいか改善点を言ってください』というのが、このごろの多くの学校での授業研究会です。

そして、学力向上で大きく成果を上げている岸本中学校（鳥取県伯耆町立）なんかは、私が何を言うか待っているのです。午前中2、3時間目の授業を参観したら、4時間目は私が「授業参観メモ」を作成する時間が確保してあるのです。だから、私も、このように熱心な学校の授業研究会に参加するときには、重くてもワープロを持参してA4版で4～6枚のメモを作ることもあります。そのための時

間まで確保されているのですから。

そこで、厳しいのを言ってくれと。最初、4年前はあんまり厳しいことを言われたので、ある若い先生だということですが、ドアをぶち蹴った人がいたということでした。しかし、それでも『先生、今日の授業見てどう思うか。みんなの言ってくれ』と言って今でもやります。それを乗り越えたときに、本当に指導力がつくのです。そのような厳しい研修を、残念だけど山口県でしている学校はないとは言わないけど、少ないですね。附属学校にしても、かならずしも自分の教室に持ち帰って真似をしたくなるような授業は少なくなったという参観者の声を聞いたことがあります。一般の学校に限らず、附属学校においても、全体として「授業の指導力」が落ちているのも確かですね。ついでに、研修を推進するための予算も少ないようです。

鳥取県あたりでは、県外から講師を招聘するのに1回につき10万円前後の費用がかかるということです。そういう研修を年3回くらい各学校が申請したら、ほとんど無条件でパスするようです。それも、本来の学校予算にプラスする形で出されるようです。だから、私は年間で、かなりの回数、近県の学校現場の授業研究会に出ますが、そのうち半分は、結果的には鳥取県に行っています。それほど熱のこもった授業研究会をしているのです。先生方も熱心ですが、研修をめぐる条件も良いのです。

ということで、私も山口県の置かれた状態をある程度は知っていますから、後は先生方の知恵です。そして、幸いC先生という人の最後の年に付き合っているわけですから、何か最後の年にできることをお互いがする。

それは、最終的には自分がより教師らしい実践をすることに、最後は行き着くはずです。そして、この研修がやってよかったな。次の年にも、生涯にわたって指導力が身につくような研修をし続けなかったら、そんなに教師というのは外からみて誉められた存在にならないのです。

今、教師に、それが問われているのです。ましてや、『指導力不足教師』ということで、認定する委員会も設けられている時代です。

そして、もっといいますと、97年度までは教員の採用試験を受けたら大体の人が合格していたのです。

ですから、お互いに、私もそうですけど、中には満足にできない人がいてもおかしくないのです。だからこそ、一生懸命に研修しなければならない。そういう論法じゃないですかね。

終わらしましょう。これ以上は、私に言わさない方が良いと思いますよ。』

7. 翌朝のFAXによる助言

教育実践の上で困っておられたC先生には、授業研究会の席上で、率直に助言や提言を申し上げたつもりであった。それでも、いくつかの気がかりなことが残った。

そこで、翌朝、研究室から次のようなFAXを送信して、助言することにした。以下に、そのまま、収録しておく。

FAX ○○○○-××-△△△△

A県○○町立B小学校

C先生、諸先生方へ

おはようございます。

昨日お世話になりました山口大の乗原です。

今朝、子どもたちと出会って、すぐに指導できること、授業を成立させるための基礎的な事を書きますので、さっそく教室で試してみてください。

今朝の朝の会で子どもたちに出会ったら、まず、「おはよう（ございます）」と大きな、はっきりとした明るい声で、朝の挨拶をしてやってください。

そして、C先生の方をきちんと向いて、「おはようございます」と言えた子どもに、「○○くん（○○さん）、きちんと言えたね」と誉めてやってください。もう一度練習すると、ほとんどの子どもが出来はじめるでしょう。

このように、繰り返し練習することを忘れてはいけません。子どもは練習が好きです。

つぎに、子どもといっしょに教室の机の縦横の列をまっすぐ揃える仕事をしてみてください。ゆっくりと時間をとって、丁寧に指導すると、不思議なくらいに学習への構えが身につきます。

そのとき、黒板のところへ出て発表できるように、間を空けると良いでしょう。

床板やタイルの線を利用して、マジックなどで印をつけておくと、子どもたちも日ごろから気をつけるでしょう。これも、一度、丁寧に指導しておくと必ず定着します。

そのあと、「自分が思う、いちばん良い姿勢をしてみよう」と話しかけてみてください。きっと何人かの子どもが良い姿勢をすることができるはずですから、その良さを誉めてやってください。

このように、子どもたちが自分の力で選び取った行動（姿勢）の中の「ほんの少しの良さ」を見つけて（発見して）誉めることがコツです。

そして、「あと3分で1時間目がはじまるね」などと、まずは先生が時計やチャイムを気にしながら、時間を守ったり、学習の準備（机の上に教科書とノートなどを出す）の仕方を丁寧に指導したりしていくことです。

このあとは、昨日の午後申し上げたことを思い出しながら、子どもたちの「学習活動」を引き出し（惹き起こし）、促進し、発展することを心がけてください。

ちなみに、「活動」とは、「生き活きとした動き（仕事）」のことです。

子どもたちが取り組んでみたくなるような仕事をたくさん作ってやってください。

そのとき、子どもたちにとっては「半分は既にできること」を元にして、「あとの半分が新しい仕事」であれば、取り組みやすいのです。

C先生にとって、この半年が、あとから見れば「教師として一番楽しい時だった」と言えるような時間となりますことを、私も念じています。

どうか、校長先生をはじめ、すべてのB小学校の教職員の方々が力を貸してあげてください。

2006年10月5日（木曜） 6時45分

研究室にて（自筆のサイン）

8. 第2回目のC教諭授業の参観

a. いきさつ

C先生の授業を初めて参観して2週間後の、2006年10月20日（金曜）の朝、筆者はB小学校の校長先生に電話をした。7時57分のことであった。校長先生に伝えたのは、「本日11時ごろ、そちらに行くことができるので、C先生の意向を聞いてほしい」ということであった。

直後の8時05分には、校長より電話があり、「来てほしいとのこと」であった。用事を済ませると、すぐにB小学校へ直行し、10時02分は、校長室に着いた。

b. C先生の音楽授業を参観

第3時限目の音楽授業を参観することになった。題材は「イルカの歌」である。この日の学級の子どもたちは12名。欠席児童は1名なので、学級には11名がいた。

音楽の授業時間の前後の経過と、大まかな授業の流れは、つぎのとおりであった。

メモ①

10時35分、3時限の授業始まりの予鈴（5分前）が鳴る。

C先生は、ジャージ姿のまま、まだ校庭にいる。

10時38分、C先生、教室に入る。授業始まりまでに、あと2分なのだが、先生も、子どもたち（3人）も、時計（時間）を意識している様子はない。学習準備の気配、なし。

10時40分、チャイムが鳴る。教師も、子どもも、動こうとしない。子どもは3人。

10時40分40秒、教師「チャイムが鳴っちゃいましたよ。」子どもは3人。

10時42分、教師「まだ、入ってこんの？」

10時43分、子どもたち7人になる。保育室へ行く子どもがいる。

男児「遅れて、すみません」という。

トイレに行く子どもに、教師「はやく行ってきなさい」

メモ②10時43分30秒、教師「何分たったら、みんな、そろうんですか」

10時44分、11人の子どもうち、5人が着席。一人は、床に座って靴下をはく。教師「〇〇ちゃんが来ません。」その子は、足の皮をむいたとので、保健室へ。

10時45分、机の上に、音楽の教科書を出している子ども、一人。

あとの子どもは、机の上に何も出ていない。

10時45分40秒、教師「そろいましたか」

10時46分、教師「じゃあ、やりましょう」

子ども「日直さん、おねがいします」、

もう一人「日直さん、お願いします」。

日直の女兒、小さな声で「いまから、3時間目の勉強を始めます」

教師の合図で、腕回しの運動。教師も、子どもも体育の服装のまま。

10時47分、教師「じゃあ、「いるかはどんぶらこ」をやって元気を出しましょう」

教材は、音楽の教科書に載っている歌である。

子ども「カラオケでも、歌うんですか」

教師「歌ってみましょう」

10時47分50秒。カラオケの音楽が始まる。机の上をたたいたり、拍手をしてリズムをとりながら、歌う。

10時49分30秒、音楽が終わる。

教師「何拍子ですか」、子どもたち「3拍子!」と私語的発言。

私語（指名のない、勝手な発言）が多い。

教師「もう1回、チャレンジして見ましょうか」

10時50分35秒～10時52分10秒。音楽。

私語が多い。教師、注意する。

教師「自分で、なんかありますか」

子ども「なんだか、だんだん難しくなってきた」

以上、メモ②

以下は、気付き。

○私語や自分勝手な発言が多い。

挙手と指名の原則を崩しているのは、じつは教師であること。

○黒板と子どもの間の教卓の上。

教科書やノートが山積みで、せっかく準備した音符や休符のカードの置き場もない。

途中で、見つからなくなる。

○机の配置がばらばらで、揃っていない。

○手悪さをしている子どもが多い。筆箱の鉛筆やティッシュをいじっている。

○イスに着席しているときの姿勢の崩れ。体のねじれ、背中が板に付いていない、など。

○リズムの取り方が難しいのだが、教師がやって見せれば、すぐにできること。

○教師が、挙手している子どもに指名する。

そのあと、子どもの不平の言葉。「あちらの（席の）ひとばかりじゃ」「やりたい!」「ええ、けっきょく違う人（に指名した。自分に当たらない）」「なんで?」「なんで、こっちばかり当てるん?」「こっちは、あたらん」など。

◎とても良い場面

11:16、「四分音符・八分音符・八分音符・四分音符」に、

「タン タタ タタ タン」と板書させる。

子ども「これで、いいですか」。ここまでは良い。

しかし、聞き手の子どもの応答が、はっきりしない。

○板書の字を、「薄く書いている」と、子どもの間で問題になる。

○教師「では、たたいてみますか」。子どもは、ひじを付いて手をたたいている。

教師の指示が徹底せず、手をたたいていない子どもが、何人もいる。

○その班が、どのリズムカードをたたかかを決めるために、時間がかかりすぎる。

班の仕事を決めることで、混乱が生じている。

教師「もめない」というが、「もめる」原因を作っているのは教師の指示。

○授業の終わり。

11時27分、教師「じゃあ、終わらしましょう」

子どもたちの中に、終わりの合図がないのに、教科書などをしまっている子どもがいる。

○日直「気をつけ、これで3時間目の勉強を終わります。れい」

礼をしない子どもがたくさんいる。11時27分50秒、授業終了。

d. C先生と栗原で「かけざん九九」授業

つづく4時限目には、筆者も「かけざん九九」の授業をすることにした。最初の15分をベテランのC先生にしてもらって、あとの30分間を、栗原が授業をすることにした。内容は、急遽「いろいろな数え方」という題で25分間の授業をして、残る5分間は栗原の授業を振り返って、子どもたちと話し合うことにした。

授業が始まるまえの11時30分に、栗原、C先生に「10分か15分、先生が授業されたら、そのあと私が授業をしましょう。合図をしますから」と打ち合わせ、校長先生にも了解をしていただく。

11時32分、教師「始めましょう」

子どもたち「ええ!」「まだ2分しか、やすんでないじゃあ」などの言葉。

教師「みんな、(算数セットを)持ってきていないんですか?」

子どもたち、棚から算数セットを出して、中をさがしている。

11時34分、教師「(セットの中身を出し始めた?)○○くん、あとしてくれませんか」

11時35分、教師「あと、しまうけえ。(必要な物だけ出して、箱は)入れとって!」?

11時38分、教師「じゃあ、やりましょう」

日直「今から、4時間目の授業を始めましょう。気をつけ、礼」

以下、栗原のメモ「11:30~12:15」

教師、いきなり「 3×4 」と板書して、「これはなんと読みますか」と子どもに問う。

11時40分、教師「この意味は、日本語で言うと、 3×2 の意味は、何でしたかね」

子どもたちは、机の上におはじきを並べていて、教師の言うことを聞いていない。

授業のあと、校長室で、このことを注意する。

11時27分、簡単な授業のメモ。

*じつは、○は、全部書いてあるわけではない。

「 T ○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○ 20

数える

○○ ○○ ○○ ○○ ○○ ○○ ○○ ○○ ○○ ○○

2、4、6、8、10、・・・

○○○○○ ○○○○○ ○○○○○ ○○○○○

5、10、15、20。

○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○○ ○○

3、6、9、12、15、・・・20

○○○○ ○○○○ ○○○○ ○○○○ ○○○○

4、8、12、16、20。 」

11時41分、栗原と交代する。

栗原「算数セットを机の横の床の上において、ノートと鉛筆だけを出しなさい。

1分でできるかな。ようい、スタート」

子どもたち、急いで出し始める。

最初に、机の上にノートと鉛筆を置いた女兒を「〇〇さん、いちばん」と誉める。

それを聞いて、急いで出そうとする子どももいる。

ノートがない子どもに、栗原、持っていたA4用紙を半分に折って手渡す。

もう一人、ノートを忘れている子どもがいる。*ノートが揃っていない事実。

授業を始める。

日直の声が小さい。注意して、もう一度やりなおし。

栗原、黒板に「10/20」と書く。

子どもたちに、ノートを開いて、日付を書くように指示する。

栗原、赤いボールペンを持って、「これは0（ゼロ）の字がよい」「(10/20という日付だけではなくて、曜日の)「金」まで書いたとはすごい」などと言いながら、赤丸をつける。

一人の男児「まだ、見てもらってない」と栗原を呼ぶ。これは「自分のノートも見てほしい」とのサインである。

栗原、さっそく、その子のノートを見て、丸をつける。結局、欠席者をのぞく11名全員のノートに○をつけることになる。

子どもに提示する大きな磁石がなかったので、子どもの算数セットの中の「花の形」の磁石を借りて、黒板に並べ始める。

子どもたちには、「1、2、3、4、5、・・・」と、一斉に声に出して言ってもらうことにする。ただ教師が黒板のところまでしていることを、遠くから見ただけではなくて、磁石の数を大きな声に出して数えるのも、立派な「学習活動」である。

栗原「声を出していない人がいるよ、口の開け方の小さい人がいるよ」と注意して、全員が参加するようにとのメッセージを出すことに。

さらに、「声が揃っていない、スピードを出して」などと注意する。すぐに、声が揃うようになる。

10個と11個の間をあけて、花磁石を並べる。

栗原「なぜ、先生は、ここを離れたと思う？」

栗原の問いに対して、勝手に発言をした子どもに注意する。

手を上げた子どもに指名する。

男児「離しておく方が、わかりやすいから」と答える。

栗原「そうです。これを、手をあげて言うと、もっといい」。

子どもたちに、何度も「1、2、3、4、5、6、7、8、9、10。

11、12、13、14、15、16、17、18、19、20」を数えてもらう。

K「いま、一つずつ数えたけど、ほかに数え方はある？」

子どもたち、口々に「2、4、6、8、10」など言う。

栗原、磁石を移動させて、「2ずつのかたまり」にする。

子どもたちと一緒に、「2、4、6、8、10、12、14、16、18、20」を繰り返かえす。「14、16」あたりに、抵抗のある子どもが数名いる。

さらに、○「5、10、15、20」

○「3、6、9、12、15、18、20」も。

少し抵抗あり。言えないといった男児、上手に言う。

途中で、女児、泣き出して、保健室へ。(ときに、こうした状態になるという)

○「4、8、12、16、20」

全員(10名)が、言えるようになる。

○栗原、板書「 $5 \times 4 = 20$

$4 \times 5 = 20$ 」

みんなで読む。

そのあと、栗原「こたえが、おなじ20になるね」で終わり。

○授業の感想を3人が述べる

一人の男児「楽しかった」という。

12時15分授業終了。

栗原「日直さん、大きな声で」と指示。きちんとした授業終わりの「あいさつ」ができる。あいさつが終わったあと、授業終わりのチャイムが鳴り始める。

以上が、第2回目のC先生の音楽授業の参観と、C先生と栗原が分担して行った算数授業のメモである。

栗原授業の参観で学び取ってほしかったこと(まとめ)

○ノートと鉛筆を机の上に出すときに「1分でできるかな」と時間を明示したこと。

子どもたちには、できるだけ具体的で、分かりやすい目あてを明確に示す。

そうすると、子どもは活動しやすい。

○子どもが活動したあとでは、教師からの評価を忘れない。

栗原「○○さん、いちばん」と誉めたこと。

すると、他の子どもたちも急ぎ始める。

- 授業では、かならずノート作業を入れる。
ノートを出して、日付と曜日と授業の題名を入れる。それは、学習活動であること。
- 教師の赤ペンには威力があること。丸付けは、一瞬でできる評価であること。
この字のここが上手など、具体的な事実を誉めること。
男児の「まだ、みてもらってない」は、見てほしいとの意欲の現れであること。
- 磁石などを黒板に提示するときに、子どもたちには、かならず声を出させること。
これも、立派な学習活動であり、集中力を育てる。
- 勝手な私語は、かならず注意すること。
子どもたちが挙手をして、教師が指名をして、できれば立って発言させること。
- 声に出して数えるなどの活動は、何度も繰り返すこと。
子どもは、繰り返しが好きであること。
- できれば、簡単な宿題を毎日出すようにする。
宿題にも目配りした授業をすること。

e. 第3回目のC教諭授業の参観

2007年11月16日、栞原、B小学校の午後の公式の授業研究会に招聘される。このたびも、あらかじめ校長先生の了解をいただいて、11時30分からのC先生の学級の授業を参観することにした。

この日の2年、C学級の子どもたちの授業の開始の仕方は、目を見張るものであった。C先生が「10、9、8」とカウントダウンを始めると、子どもたちも声を合わせて「7、6、5」とつづける。「ゼロ」まで来ると、子どもたちが「日直さん、おねがいします」と声をかけた。すると、日直が「きをつけ」「れい」と合図する。そうして、全員で「お願いします」のあいさつの言葉を言うのである。11時30分、定刻に授業は始まった。

学習の内容は、「6の段」の復習である。最初に、円盤状の厚紙の周囲に「9、2、6、4、8、1、・・・」などの数字が書いてあり、中央には、穴が開いていて黒板に「6」の数字が書かれている。教師が指示棒でさす数字をつかって「6の段」の復習をしていくのであった。ときに、私語が聞こえてくることもあったが、子どもたちの「授業の実力」は確実に大きくなっているようだ。

午後の研究協議後の筆者の指導講話は、栞原によるC教諭の授業参観は今回を以って最終とすること、C先生には学級の子どもたちが終業式の日を迎えるまで授業改善を心がけて、無事、笑顔のうちに退職の日を迎えていただくこと、そしてB小学校の先生方全員が支援を惜しまないこと、をお願いした。そして、「C先生が笑顔で退職の日を迎えられた」との「風の便り」が届くことを待っていることを伝えて、B小学校をあとにした。

追記■2007年1月13日夕刻、A県B小学校のC先生が、とても頑張っておられるとの「風の便り」を耳にすることになった。